

門

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1910) 「朝日新聞」
参考：『晩春』(1949) 原作：広津和郎 『父と娘』より
監督：小津安二郎 脚本：野田高梧 小津安二郎
出演：曾宮周吉 笠智衆 撮影：玉井正夫
紀子 原節子 音楽：伊藤宣二
三輪秋子 三宅邦子

父母未生以前本来の面目は何か

夏目漱石『門』は『三四郎』『それから』に続く三部作の最後の作品といわれる。三四郎は美禰子が他の男と結婚し、失恋する。『それから』の代助はかつての恋人で、友人と結婚した三千代との恋を取り戻そうとして、社会的制裁（実家からの勘当）を受ける。『門』の宗助は友人と離婚した御米と結婚し、ひっそりと暮らしている。

『三四郎』と『それから』は映画が原作理解の参考になったが、『門』は映画化されていない。そこで、小津安二郎監督の映画『晩春』を選び、強引に参考作品とした。その理由の一つは、宗助が参禅して「父母未生以前本来の面目は何か」という公案を与えられたのが鎌倉の円覚寺という縁による。その寺には小津安二郎の墓がある。墓碑銘は「無」。

『晩春』の周吉（笠智衆）と紀子（原節子）は北鎌倉の円覚寺の近くの家で暮らしている。小津安二郎は『門』を意識して、『晩春』を撮ったにちがいないというのが私の推理だ。

小説『門』の夫婦と映画『晩春』の父娘との関係には似たような雰囲気を感じられる。『門』の宗助と御米は仲のよい夫婦であり、『晩春』の周吉と紀子は仲のよい父娘だ。私が観た読んだ小説では『門』の宗助と御米、私が観た映画では『晩春』の周吉と紀子との仲の良さが特に印象深い。

『門』の宗助と御米の夫婦は世の中の日の目を



門

映画文学人生論

ないものが、寒さに堪えかねて、抱き合って暖を取るような具合に、御互い同志を頼りとして暮らしていた。苦しい時には、御米が「でも、仕方がないわ」と言い、宗助は「まあ、我慢するさ」と言う。二人には過去に犯した罪の意識があり、お互いにその傷にはふれないようにしている。

『晩春』の紀子は、「あたし、このままお父様といたいので、どこへも行きたくないの、このままお父様と一緒にいるだけでいいの」と言うが、老い先短い父親は自分が死んだ後の娘の暮らしが心配だ。なんとかして娘を嫁に出したいと思って、自分は再婚の意志があることを娘に告げる。

やっと娘を新婚旅行に送ったあと、娘の友人から再婚の意志を確認された周吉は、「ああでも言わなければ紀子は結婚せんからね」と答えた。

『門』と『晩春』からしみじみと伝わってくるのは人間のどうしようもない孤独である。小津安二郎は享年六十で亡くなるまで生涯独身。原節子も独身を通して。夏目漱石は結婚して、二男五女の父親となったが、彼が書いた文章には人間の絶対的孤独感が漂っている。

『門』の結末で、宗助は横町の銭湯で聴いた鶯の問答を御米に繰り返して聞かせた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「え、まだ充分に舌が回りません」。

銭湯で聞く鶯の鳴きはじめ